

ビワ生育情報

第 3 報
千葉県農林水産部
令和6年12月号

本年は出蕾期が平年より遅く、樹の中でばらつきも大きかったため、12月1日時点で、「楠」、「大房」、「田中」の開花は平年よりやや遅く、開花が早い花房と遅い花房のばらつきも大きくなっています。

花房の発育

ビワの開花期を表1に示した。

暖地園芸研究所の開花始期は、「楠」が11月12日で、平年及び前年より5日遅かった。「大房」は11月26日で、平年より2日遅く、前年より7日遅かった。「田中」は11月14日で、平年より2日遅く、前年より4日遅かった。開花盛期は「楠」が12月1日で、平年より6日遅く、前年より13日遅かった。「田中」と「大房」は12月1日時点で開花盛期に至っていない。

花房の出蕾期は3品種とも平年より遅く、樹の中でばらつきが大きい傾向がみられた。また、10～11月の平均気温が高く推移したこともあり、早い時期に出蕾した花房の開花は早い、遅い時期に出蕾した花房の開花は遅く、開花期のばらつきが大きくなっている。

表1 ビワの開花期(暖地園芸研究所)

品 種	開花始期 (月. 日)			開花盛期 (月. 日)			開花終期 (月. 日)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	11.12	11. 7	11. 7	12. 1	11.25	11.18	—	12.23	12. 7
大 房	11.26	11.24	11.19	—	12.17	12. 5	—	1.27	12.25
田 中	11.14	11.12	11.10	—	12. 1	11.22	—	1. 6	12.14

平年：1994年～2023年の30年間の平均

開花始期：花房の10%が開花、開花盛期：花房の50%が開花、開花終期：花房の90%が開花

令和6年11月の気象

令和6年11月の半旬別の気象を表2に示した。平均気温は第2、第5半旬で平年より低く、それ以外は平年より高く推移した。月平均気温は15.0℃で、平年より1.3℃高く、前年より0.5℃低かった。

降水量は第1、第3、第6半旬で平年より多く、第2、第4、第5半旬は平年より少なかった。月合計は140mmで平年の96%、前年の168%であった。

日照時間は第5、第6半旬は平年より多く、第1半旬は平年並み、第2～第4半旬は平年より少なかった。月合計は139時間で平年の95%、前年の82%であった。

表2 令和6年11月の気象(アメダス館山市)

半旬	平均気温 (℃)			降水量 (mm)			日照時間 (hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	18.6	15.7	18.4	55	24	1	23	25	31
2	14.2	15.0	18.9	8	23	18	17	25	17
3	16.3	14.2	12.2	30	24	5	17	24	22
4	14.2	13.2	14.6	15	26	57	13	24	30
5	11.3	12.3	15.4	0	26	2	30	24	35
6	15.2	11.6	13.5	34	23	2	39	24	33
平均/計	15.0	13.7	15.5	140	146	84	139	146	169

平年：1991年～2020年の30年間の平均

なお、表の数値は、表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計が一致しない場合がある。

1月の作業

ビワは、厳寒期に入ると枝葉の伸長や根の活動は停滞するが、開花は引き続き進行し、幼果はわずかながら肥大する。本年は、開花の進みが平年よりやや遅いが、寒害を受けやすい圃場等では、以下の寒害対策を適切に行う。また、春以降の本格的な果実肥大に備えて追肥を行う。

寒害対策

ビワの幼果は、 -3°C 以下の低温に遭遇すると、胚(種子)が凍死して生育が止まり、落果してしまう場合がある。蕾あるいは開花中の花は寒害を受けにくい、受精後は幼果の発育が進むにつれて凍死しやすくなる。年内に準備する寒害対策としては、燃焼法、送風法、被覆法、耕種的方法がある。燃焼法は、園内をヒーターで加温して寒害を防止する方法である。送風法は、防霜ファンを設置することで、逆転層内の上方の暖かい空気と樹冠面付近の冷たい空気をかくはんし、気温を均等にする効果がある。燃焼法、送風法ともに、寒波が襲来する前に設置場所の整備と機器の点検等の準備をしておく。被覆法は、こも等の被覆資材で樹体を覆う方法であり、樹高の高い成木では難しいが、若木や幼木では利用可能である。耕種的方法は、樹体管理が基本であり、樹勢が旺盛になると着葉数が多くなることから、樹冠内の保温効果が増す。年間を通じて、施肥、病害虫防除及び樹体管理を適切に行う。また、冷気の停滞を防ぐため、防風林の下枝は事前に刈り込んでおく。

施肥

時期別の標準施肥量を表3に示した。果実の肥大及び春枝の発芽、伸長のための追肥は、春肥または実肥と呼ばれ、1月中に施用する。春肥では年間施肥量の30%程度を目安に施用する。土壌pHが低い場合には、苦土石灰などの石灰資材を施用し、pH6.0~6.5に矯正する。

苗木の植え付け

ビワの苗木の植え付けは、発芽直前で根の活動が緩慢な時期が良く、通常は2月中下旬が適期であるので、早めに準備しておく。枝や根の伸長が始まってからでは、植え傷みが激しく、発芽が遅れるので、天候や苗の発育をみて時期を逃さないようにする。

表3 ビワの時期別標準施肥量(成分量 kg/10a)

時 期	耕土の浅い園			耕土の深い園		
	窒素	りん酸	加里	窒素	りん酸	加里
9月中旬(基肥)	12	9	9	11	9	7
1月上旬(春肥)	10	9	5	7	8	3
6月上旬(夏肥)	5	4	4	5	3	3
合 計	27	22	18	23	20	13

(千葉県主要農作物等施肥基準より)

管理上の留意事項

1. 土壌pHは6.0~6.5に矯正する。
2. 苦土石灰は、化学肥料施用の2週間前に施用し、その後耕うんする。
3. 施肥後は軽く耕うんする。ただし、夏肥施用後は、その必要はない。
4. 有機物は積極的に投入する。有機物の深層施用には必ず完熟堆肥を用いる。

発行：千葉県農林水産部生産振興課園芸振興室

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室
電話 0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。
<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>